

世界の終末後のクルーソー：『ロビンソン』 変形譚として *I am Legend* (1954) を読む

佐 藤 和 哉

もうお前は、死の大海原に取り囲まれ、闇の島に閉じ込められた気味の悪いロビンソン・クルーソーではなくなるんだ——*I am Legend*

1. はじめに

リチャード・マシスン (Richard Matheson, 1926–2013) の中編小説『アイ・アム・レジェンド (*I am Legend*)』(1954 年) (以下、『レジェンド』とする) は、「吸血菌」によって人類が吸血鬼と化してしまった世界で、ただ一人「人間」として生きのびた主人公ロバート・ネヴィルの孤独な闘いを描いている。この小説は、『地球最後の男』(アメリカ・イタリア、ウバルド・ラゴーナ／シドニー・サルコウ監督、1964 年)、『地球最後の男オメガマン』(アメリカ、ボリス・セイガル監督、1971 年)、『アイ・アム・レジェンド』(アメリカ、フランシス・ローレンス監督、2007 年) と、大規模商業映画として少なくとも 3 回映画化されており、疫病・細菌戦争そのほかの理由で人類の大部分が凶暴化・怪物化・ゾンビ化し、正常な主人公(たち)に大群となって襲いかかる……という図式を初めて提供した作品であることから「ゾンビ物」の元祖としても知られている(この作品に影響を受け、ゾンビ映画の嚆矢となる作品としては、『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』(アメリカ、ジョージ・A・ロメロ監督、1968 年)がある)。それもあってか、マシスンも『レジェンド』も、カルチュラル・スタディーズや SF 批評の分野で、近年しばしば取り上げられるようになり、現在で

は相当数の研究の蓄積がある。

小論では、この作品と『ロビンソン・クルーソー』との関連を取り上げて議論する。この論点は、『レジェンド』について詳細かつ多角的に検討しているエイミィ・J・ランソムをはじめ、吸血鬼やゾンビの文化的表象についての論考があるグレゴリー・A・ウォラーなどの研究者が言及しつつも、あまり掘り下げて追求していないように見受けられ、議論の余地を残しているように思われる。

実際、『レジェンド』には、冒頭に掲げたように『ロビンソン・クルーソー (*Robinson Crusoe*)』(1719-20年)への言及がある(以下、作品への言及は『ロビンソン』、主人公については「クルーソー」とする)。ネヴィル＝クルーソーを闇の島に「閉じ込められた (imprisoned)」と表しているのは、「人喰い人種」への恐怖ゆえに島から出られないクルーソーのある側面を的確に突いた表現だと言えるが、そのほかにも、クルーソーとネヴィル、『ロビンソン』と『レジェンド』を並置して読んでみることで、双方の作品の理解に何かをつけ加えることができるかもしれない。

核戦争後の時代を描いた近未来 SF『レジェンド』と、二つの世界大戦へと世界を導くことになる帝国主義に一つの思想的源流を提供した『ロビンソン』は、ともに、多数の敵、それも主人公とはまったく「異質」な存在——クルーソーの場合には「人喰い人種」、ネヴィルの場合には「吸血鬼」——に取り囲まれた(と考えている)主人公を描いているという点で、その間に一定の相同性を認めることができる。また、いずれも主人公の「身体」を、食餌行為と直結させている点にも共通性が認められる(クルーソーと食人種については、ウィーヴァー＝ハイタワーの議論を参照(Weaver-Hightower 90-91))。さらに、水間千恵が指摘するように、ロビンソン変形譚の主体概念に関する議論が、他者としての野蛮人表象を対象にしてきたことからすると(17)、『レジェンド』における吸血鬼の表象の持つ意味について論じること、『ロビンソン』における「人喰い人種」に関する議論との関連で新たな意義を持つのではないかと考えられる。

小論では、まず、『レジェンド』における『ロビンソン』的要素を指摘して、その相同性を確認する。次に、そこから少し離れて、『レジェンド』固有の要素を記述の細部に着目しながら検討し、最後に両者を、とくにその倫理的性格の観点から比較する。

2. クルーソー的なネヴィル

『レジェンド』の物語は、主人公ロバート・ネヴィルの日常生活を描くことから始まる。窓に打ちつけられた板が緩んでいないか、壊れていないかの確認や水のタンクの点検、修理などの木工作業のあと、ニンニクの環を作るという料理にも似た作業を行う。この作業は細かく描写される。

始めに、ニンニクの球根を鎌のような形をした、もっと小さな部分に切り分ける。それから、ピンク色で革のように固いその部分を半分に切り、真ん中にある肉のような中心部をむき出しにする。[……]アイスピックを壁のラックから抜き取ると、それぞれに穴を開けて針金でつないだ。全部で 25 個ほどの「ネックレス」ができた。(9)

この章は状況設定を読者に示しており、この後も、杭を切って削り尖らせること、冷凍食品や缶詰から夕食の準備をすることなどが、一つ一つの工程を追って逐一描かれている。このような記述の綿密さは、『ロビンソン』の随所に見られる、たとえば板を作る (Defoe 59)、焼き物を焼く (103) といった作業の描写の細かさに類似しているし、クルーソーの生活の「家庭的な」側面の描写にも近接していると言える (クルーソーの「家庭性」をめぐる議論に関しては、O'Malley, Chapter 2 参照)。また、一方の壁を作業場にした「まったく機能性だけの部屋」となっているネヴィルの寝室や (8)、「天井まで缶詰が積み上げられている台所」(11) は、「必要なものがすべて蓄えられていて手の届くところにある倉庫」(60) になっているクルーソーの洞穴を想起させる。

つぎに、このような日々のルーティンの作業を通じて、厚い扉と太い門、窓に打ちつけた板で家を強化するネヴィルの姿を、洞窟の周囲に二重に木の杭を打ち、それがやがて繁って家を覆い尽くすような「砦 (Fortress)」、あるいは「城 (Castle)」を築くクルーソーに重ねて見ることも可能だろう。このようにして、夜な夜な自分の家に「閉じ込められる」ネヴィルの生活は、小説全体をおおう閉所恐怖症的な空気を醸成しているが、実は、ネヴィルの生活 (そして正常だった世界においては、彼の家族の生活) を息苦しく取り囲んでいる、もう一つの大きな要因は、砂嵐 (dust storm) である。この砂嵐については、明示的には示されていないが、作品中で使用されたと考えられる核兵器との関連が示唆されているほか、ネヴィルの考察によれば、「吸血菌」を急速に伝染させる要因ともなっている。その結果としてネヴィルの「幽閉された」生活があることからすれば、この砂嵐は、ネヴィルを二重の意味で閉じ込めているとも言える。

一方、『ロビンソン』の物語は、食人種への恐怖のために心理的に島に閉じ込められた男の話として読むこともできる。クルーソーの島がオリノコ河の河口付近、すなわち大陸に充分近い場所にあったことは、物語の梗概にもなっているタイトルによっても明らかだし、視界に入る範囲に陸地の影が見えることについては言及があるので (92-93)、そこまでたどり着くことは、物理的にはまったく不可能ではなかったかもしれない (潮流などの点で困難はあったようだが)。少なくとも、砂浜で足跡を見つけたあと、フライデイと一緒に暮らすようになるまでのほぼ 10 年の間、家からほとんど出ない「ひきこもり」であった期間のクルーソーは、心理的にも物理的にもまさに「閉じこもって」いたわけであり、『レジェンド』の閉塞感を共有している。

このように、それぞれに閉塞的な、あるいは社会から隔絶された状況にあるネヴィルとクルーソーは、一から何かを作り上げていかなければならない境遇に追い込まれているという点でも共通する。そして、そのようにものを作り上げていくうえで、手を動かすことと理性を用いることの重要

性が前景化される点にも共通点が見出される。この点についてクルーソーは次のように語っている。

[...] ここで以下の点を述べておかなければならない。それは、理性こそが、数学の本質であり根源なのだから、理性をあてはめてすべての物事を考え、整理すること、そしてもっとも理性的な判断をくだすことによって、誰でも時を経れば、すべての物作りの技に熟達できるだろうということだ。(59)

ものを作るという人間の営為に関する、このクルーソーのコメントは、ネヴィルが「吸血菌」を発見していく過程にまさにあてはまる。

工場に勤務する労働者と設定され、おそらく、その教育水準はそれほど高くないと想定されるネヴィルは（「解剖学の知識はまったく持っていなかった」(21) という記述がある）、独学で入門書から次第に専門書を読み解いて解剖学や免疫学について学び、顕微鏡を使って観察を重ね、さらには吸血鬼の身体を使って実験を積んだ結果（これについての倫理的評価は別として）、ついに「吸血菌」の発見にいたる。最終的に、この菌の発見がネヴィルに何ももたらさなかったとは言え、少なくとも吸血鬼の起源に関する研究に没頭しているあいだのネヴィルは、生活の単調さから逃れて生きがいを得ることができた。「吸血菌」の発見は、クルーソーの述べる通り、一つ一つ理性を働かせ、手を動かして実験を重ねて得た成果である。

以上のように、日常生活が細かい細部にわたって描かれている点、何かに「閉じ込められた」環境にいる点、そして「理性と実践」によって困難を除去しようと試みている点などに、『ロビンソン』と『レジェンド』の相同性を見ることができる。

3. 『レジェンド』のディテール

文化の大衆化が進むなかでも、「1950年代、それ以降もクラシック音楽

のレコードの売れ行きは好調だった」(Patterson 346)ということであり、ブルーカラーの労働者として設定されているネヴィルも、一般的には中流階級的な嗜好とされることの多いクラシック音楽についての趣味を有している。すでに冒頭近くで、旋盤で木の杭を削りながらネヴィルはベートーヴェンの交響曲の第三番、七番、九番を聴いていて、長い空虚な時間を埋められるので、「幼いときに母親から教わってこの種の音楽が鑑賞できるようになっていたこと」を喜んでいる(10)。

以下、ネヴィルは、シェーンベルクの弦楽六重奏曲「浄められた夜」(12)、ブラームスのピアノ協奏曲二番(23)、バーンスタインの交響曲二番「不安の時代」(25)、モーツァルトの交響曲第四一番「ジュピター」(44)、ラヴェル「ダフニスとクロエ」第一組曲、第二組曲(83)、そしてシューベルトの交響曲第四番(125)を聴いている。さらに、彼が「人間」だと思っていたルースが、ラフマニノフのピアノ協奏曲二番のレコードを選んでかけたときには、「彼女の音楽の趣味はとても進んでいる、というわけではないようだ」(132)と感じているところから、自分自身はクラシック音楽に通暁していると評価していることが伺える。

まず、このような音楽の焦点化、前景化は、反転して、ネヴィル自身が述べているように、音のない「空虚」な時間をも前景化することになり、ネヴィルが感じる孤独感をかえって増幅させる働きも持っている。また、作品の各所で、レコードのコレクションやレコードプレイヤー、レコードの針の音も前景化されており、ネヴィルが享受していた文明とのつながりを示唆している。

それだけであれば、単に「レコードで音楽を聴いていた」というような描写でもよかったかもしれないが、『レジェンド』では、そうはしないで、ここで挙げたように、個別具体的な作曲家名や作品名を出しながら音楽を詳細に記述している。音楽がネヴィルにとって「正常」な世界との結びつきだったが故の詳述であるとも考えられるし、さらに言えば、このような細部にこだわった記述は、ネヴィルの世界観や価値観が、クラシック音楽

に示唆される欧米の「文化」とのつながりを強く意識したものであることを示唆しているとも言えるだろう。

次に着目すべきディテールとして、『レジェンド』には、喜劇役者オリヴァー・ハーディ (Oliver Hardy, 1892–1957) (60)、詩人エドガー・ゲスト (Edgar Guest, 1881–1959) (77)、それに著述家エミリー・ポスト (Emily Post, 1872–1960) (129) などの文化人に対する言及がしばしば見られる。ゲストやポストのように、エリート文化と大衆文化の中間的な位置で活躍した文芸に関わる人物への言及は、1950年代のアメリカの大衆が一定程度「ミドルブラウ」化していたこと、また、マシスンの作品自体もそのような位置で受容されていたことを示している。この作品の設定と発表年代について考えるうえで、このこと以上に重要なのは、これらの文化的言及は、作品の設定された1970年代後半としては明らかに時代遅れであり、作品が発表された1954年に生きている人間にとってこそ意味があると言える連想や言及である、という点である。

この点に関してさらに追求すると、作中で、ネヴィルが従軍していた、とされる点についての不自然さを指摘しておかなければならない。物語の鍵の一つである、ネヴィルが吸血菌に罹患しない理由について、彼がパナマでの駐留中に「吸血コウモリ」に噛まれたことで免疫を獲得していたからだと説明されている。物語の冒頭場面でも、このパナマの駐留への言及があり、「ネヴィルはパジャマの上着を着なかった。これは戦争中のパナマで身につけた習慣だった」(15)とされているほか、「パナマでひどく酔っ払っていたときに、胸に入れた十字架の刺青」についても触れられている。たしかに、第二次世界大戦中、戦争中と講和後1年間という制限をつけつつも、パナマは米軍基地の供与を認め、アメリカ軍とともに戦争を戦うこととなった(若松・高橋 48)。

しかし、物語が設定されている1976年に36歳と設定されているネヴィルは1940年の生まれということになり、第二次世界大戦に従軍しているはずはない。ついでに言えば、1954年に直近でアメリカが参加していた

大規模な戦争、朝鮮戦争時にはネヴィルは11～12歳で、これにも従軍の可能性はない（さらに言えば、朝鮮戦争でパナマに駐留することも考えるにくい）。従って、この「戦争」は朝鮮戦争のあとに起こった戦争であるはずだが、そのような戦争についての具体的な記述は物語中にはない。確かに、話のなかで「戦争」、あるいは「細菌戦争」についての言及はあるが、戦況は一切語られていない。また、その戦争は「終わった」ものとされている（50）。物語中に登場する「爆撃 (bombing)」という言葉が与える印象としては空爆を中心とした戦争であると考えられ、少なくとも陸軍の兵隊が従軍するような地上戦を戦う戦争が展開していたことへの言及はない。この点からすると、『レジェンド』の作品舞台は、作品発表時の1954年からは近未来の1976年以降に設定されているものの、作品のなかで言及される「パナマ駐留」は第二次大戦中だと考えざるを得ない。

このような文化的背景への言及、それから「パナマ駐留」の記述から考えたとき、作品の世界は、そこで設定されている1970年代という時代よりも、作品発表時の1954年という時代との親和性のほうが高いように考えられ、物語の世界は発表時の世界とない交ぜになっているように思われる。ここで、1954年という文脈についてとくに注意を喚起しておく必要があるのは、第二次大戦中の南京虐殺（1937年）を初め、ナチスのホロコースト（1933～45年）、そして人類最大の虐殺の事例とも言える、広島・長崎の原爆投下（1945年）などの残虐行為を経たあとの時代だという点である。さらに、この年が、殺意や憎悪があからさまになり、人類の悪意の結節点とも言える「戦争」、それも「世界大戦」が終結して10年と経っていない時期であることにも注目したい。しかも、その10年のあいだにも、主立ったものだけでも、第一次インドシナ戦争（1946～54年）、第一次パレスチナ戦争（1948～49年）、朝鮮戦争（1950～53年）など、世界の各地で戦争は起こり続けていた。

戦争における暴力という点では、対日戦における、将官クラスのアメリカ軍人の発言のなかにも、その例を見ることができる。ジェイムズ・T・

パターソンは、次のようなエピソードを記述している。

のちに、1942年には、アメリカ陸軍の訓練の指揮を執っていたレズリー・マクネール將軍は、兵隊たちにこのように告げた。「私たちは戦闘を欲しなければならない。人生における私たちの目的は殺すことだ。私たちは夜も日もなく、殺すことを立案し、計画を建てなければならない」ウィリアム・「ブル」・ハルジー提督は、太平洋艦隊の指揮官の一人で、さらにむき出しの悪意を見せた。この提督は部下に、「ジャップを殺せ、ジャップを殺せ、それから、さらに多くのジャップを殺すのだ」と言った。戦艦ミズーリ号上での日本軍降伏のセレモニーのあとで、ハルジーは記者たちに、「日本の代表団の一人一人の顔に蹴りを入れてやりたかった」と告げた。(6-7)

『レジェンド』が刊行された時代が、世界的な暴力に満ち溢れていた時代であることを改めて確認しておきたい。

次節では、この点を一つの手がかりとして、再び『ロビンソン』と『レジェンド』を比較しつつ、その世界の相違について考えることとする。

4. 人間の残虐性への意識——気づくネヴィルと気づかないクルーソー

「バクテリアは突然変異する可能性がある (Bacteria can mutate)」(147) という一文から、「吸血菌」に侵された吸血鬼と闘い続けたネヴィルの世界と価値観は崩壊へ向かう。吸血菌は、人間を侵しつつも、その知性や社会性を奪わないようにと変異した。「突然変異する (mutate)」という用語は、2020年以降の世界の文脈では、コロナウィルスの「変異株」という表現で一般に膾炙するが、1950年代(およびそれ以降)の文学作品、映画、コミックにおいては、おもに核実験・核戦争の放射能の影響で巨大化したり特殊な能力を得たりする生物(場合によっては人間)の表象として、mutateから派生した、「ミュータント (mutant)」という用語が広く用いられた。現に『レジェンド』のなかでも、正常な生活を失いつつあった世界で、そ

のころ、まだ生きていた妻との会話でネヴィルは次のように語る。

「俺たち人類が、新しい、特殊な虫の種を生み出しているんじゃない
といいが、とつくづく思うよ。コロラドで見つかった、馬鹿でかいバッ
タの新種のことを覚えているだろう？」とネヴィルが言った。

「うん」

「おそらく、ああいう虫たちは…何て言ったっけな、そうだ、突然
変異しているんだ」

「それ、何？」

「つまりだな…変化しつつあるんだ。突然。何十もの、小さな進化
の段階をすっ飛ばしてな。きっと、あれさえなければ、そんな進化の
道なんか辿らなかったはずなんだ…」

沈黙があった。

「爆弾投下のこと？」とヴァージニア。

「多分ね」とネヴィルが答えた。(49 下線は引用者による)

こうして、物語の前半、以前の生活の場面から貼られていた「突然変異」
という伏線が後半で回収されて、この概念により、ネヴィルが持っていた
価値観もネヴィルを支えていた使命感も崩れ去ってしまう。

「吸血菌」の変異株により、吸血鬼的性質を持ちつつも、知性を失なっ
ていない「変異」吸血鬼（以下、「新吸血鬼」とする）は、「新しい社会」を形
成しようとする。この吸血鬼たちは、ネヴィルよりもはるかに効率的に、
かつ体系的・組織的にそれまでの吸血鬼を虐殺していく。

ダークスーツを着た男たちは、自分たちがしていることの意味を間違
いなく捉えていた。そこには男が6人、女が1人、全部で7人ほどの
吸血鬼がネヴィルには見えていた。男たちはこの7人を取り囲み、ば
たばたさせている腕を押さえつけると、カミソリのように鋭利に尖っ
た杭を、身体深くにたたき込んだ。血が暗い舗道に飛び散り、吸血鬼
たちは一人一人消えていった。ネヴィルはますます自分の身体が震え
るのを感じた。これが「新しい社会」なのか？ (149)

このように、知性を保ったままではいるはずの「新吸血鬼」たちは、その残虐性において、ネヴィルを最後に滅び去ろうとしている旧人類と少しも変わらないし、知性を失ったそれまでの吸血鬼たちよりも、知性を保っている分、一層、悪辣だとさえ言える。旧型の吸血鬼たちを敵としてきたネヴィルさえ、「新吸血鬼」の残虐性に怯えているほどである。「新吸血鬼」が築く社会は確かにディストピアであろう。しかし、それは同時に、ネヴィルの道徳性についての問いを突きつけることにもなる。ネヴィルは新旧を問わず吸血鬼を殲滅してきたので、ネヴィルが殺した吸血鬼のなかには、知性、社会性をもった存在もいたからだ（ルースの夫もネヴィルによって葬られている）。

新吸血鬼の集団と争い、彼らから銃撃されて致命傷を負ったネヴィルに、ルースはこう語る。

「確かにあなたはあの連中の顔に喜びの表情を見たでしょうね。驚くことではないでしょう。あの人たちは若いし、間違いなく「殺戮部隊」だもの。命令を受けて、合法的に殺せるの。そして、殺すことで尊敬されたり、称賛されたりしている。そんな連中に何を期待するの？ 人は、所詮誤りを犯すものよ。それに、殺すことを楽しむようになるものなの。昔からある話じゃない。ネヴィル、あなたには分かっているはず。」（157。下線は引用者による）

ここで、前節の議論を踏まえると、1954年という時代が、さまざまな残虐行為を人類が経験したあとであるということが想起される。

「吸血菌」の世界的な流行には、物語中で行われたと想定される核戦争の結果生じた「砂嵐」が大きな役割を果たしている。そうだとすれば、この物語が描く人類のカタストロフィは、人類の「悪意」の結晶が生んだものである。また、新・旧を問わず、昏睡状態の吸血鬼を木の杭によって「処理」して回るだけでなく、吸血菌を発見する過程で同じく新・旧の吸血鬼

に残酷とも言える「実験」を繰り返していたネヴィルも、また、その残虐性の咎を免れられない。そう考えると、「新」吸血鬼の凶暴性・残虐性は、人類に共有された、人間の本質的な凶暴性や攻撃性の表れだと言える。

[...] ネヴィルは群衆の顔に浮かんでいる表情にも気がついた——畏怖、恐れ、身がすくむような恐怖——。それから、彼らが自分を恐れていることに。[...] 彼らの感じていることを理解すると、憎悪の感情は起こらなかった。錠剤の入った小さな封筒を右手でぎゅっとつかんだ。終わりが暴力的でさえなければ、そして、あいつらの目の前で屠殺されるのでさえなければ……。

[...]

咳払いのような笑いがネヴィルの喉から漏れた。向き直ると、壁にもたれかかって錠剤を飲んだ。ぐるっと回って一周したんだ。生命の終わりをつげる倦怠感が身体に忍び寄るのを感じながら、ネヴィルは考えた。一周したんだ。死の世界に生まれた新しい恐怖、永遠という難攻不落の砦を侵攻する新しい迷信が。

俺が伝説の存在となるのだ。(160)

先にも触れたように、人間の本性に潜む残虐性、攻撃性によって人類が減じた世界に取って代わる「新」吸血鬼の世界もまた残虐で攻撃的な世界になる。この循環を繰り返す絶望的な『レジェンド』の世界に「救い」はない。この点について、グレゴリー・A・ウォラーは『「アイ・アム・レジェンド」が示すのは、善も悪もない世界においては、暴力は、たとえそれが吸血鬼に対して用いられ、「生存」の名の下で行われたものであるとしても、必然的に人間性を奪い「怪物」を作り出す、ということである」(262)と述べている。

仮に、この物語に微かな救いを見出すとすれば、人間存在に内在する残虐性が未来永劫にわたって存在するであろうということへの「気づき」が最後の一行に表れていることだろうか。この「気づき」の意識があるかどうか、この点を議論するために、再び『ロビンソン』との比較を試みてみ

よう。

『ロビンソン』における絶対悪とも言える食人行為ではあるが、「神」の介在によって、その残虐性が留保される(144)。「神」を知らない「野蛮人」はキリスト教徒でなく「人間」の枠内にいないために、罰の対象にさえなりえないからである。このように、キリスト教的価値観を貫徹させた評価をくだしている点で、『ロビンソン』の世界の善悪、正邪の観念に揺らぎはない。

一方、『レジェンド』では、ランソムも指摘するように(31)、ネヴィルは自らの行為を自衛のためとして正当化しつつも、昼間の吸血鬼に杭を打ち込むことについて「自分がしていることが正しいと、言い聞かせなければならなかった」(Matheson 20)と、その正当性の揺らぎを常に感じ続けていた。そして、前述のように、人間としての理性(その品性には問題があるにせよ)を保ったままの「新吸血鬼」の存在を知ること、自分の行ってきたことに潜む残虐性を知り、そして最後には、人類のあとを取って代わることになる新吸血鬼たちもまた、暴力性に満ちていることを知る。

この残虐性の連鎖は絶望しかもたらさないとは言え、人間に内在する暴力性、残虐性についての自覚について言えば、それがあのかないかでは大きく異なる。これまで見てきたように、クルーソーには、その自覚はない。確かに、「神」の導きを得ていない「野蛮人」を殺すことを一時は思い留まるものの、ヨーロッパ人を救うという名目があれば、彼らを暴力で排除することについて何らのためらいもない。『ロビンソン』が刊行された1719年は、スペイン継承戦争の終結(1713年)、ジャコバイトの乱(1715年)から数年しか経っていない時期でもあり(どちらも世界大戦のような「総力戦」として戦われたのではないことに注意する必要があるが)、また、自らもモンマス公の反乱に参加したデフォーが、人間存在に内在する暴力性に無自覚であったとは考えられない。しかし、「神」の存在を置いたがために、クルーソー＝デフォーが、信仰の埒外にある存在に対して、実際に暴力が向けられるときには痛痒も感じている様子がない。

このように、20 世紀中葉までに未曾有の拡大を見せた人間の「悪意」の表出である『レジェンド』と、のちに帝国を生むことになるヨーロッパ中心主義的な立場からの表象である『ロビンソン』を比較することの意味について、最後に触れておこう。

5. 結びにかえて

20 世紀後半において、2 度の世界大戦とその後、世界で終わることのない戦争は、『ロビンソン』の世界からは考えられないほどの質と量の残虐性を世界にもたらし続けた。その世界で生み出された物語に人間の善性を認めることができないのは当然と言えるかもしれないが、それでも、ごく僅かではあれ、そこには、「その事態に気づいている」という微かな救いが残されていると言えるのではないか。

しかし、このような読みかたの提示は、「気づかない」クルーソーを描いた『ロビンソン』が、「気づいた」ネヴィルを描く『レジェンド』と比べて、その道徳性の表出において劣ることを意味しない。おそらく話はそれほど一方的なものではない。ここで、20 世紀になって書かれたロビンソン変形譚について、アン・マリー・ファロンが述べていることを引用しておこう。

『ロビンソン・クルーソー』変形譚についての批評の多くは、18 世紀に書かれた小説とその後継作品との関係を対立的なものとして問題設定をする。新しく改善された後継作品と元の作品を、〈コロニアリズム〉対〈ポスト＝コロニアリズム〉、〈奴隷制〉対〈自由〉、〈自然主義的描写〉対〈抽象的描写〉などのように対立させる。しかし、さまざまな「クルーソーたち」の増殖も、あの存在も曖昧な島の探索そのものも今なお続けられている。私たちが目の前にしているのは、潜在的に排他的な二つのクルーソーの読みかたの間での争いではなく、世界中で現在も動き続けている文学をどのように理解して読むか、という点についてのまったく新しいやりかたの地図作りの様相なのである。(219–20)

そうだとすれば、『レジェンド』と『ロビンソン』の読みを並置することで、『ロビンソン』における暴力のありかたや他者性の認識についての考察が深化するとも言える。

また、先にも述べたように、「ゾンビ物」の原型を作った『レジェンド』に対し、さらに、その「原型」を提供したのが、主人公が（少なくとも主観的には）「人喰い人種」に取り囲まれる閉塞的状况にある『ロビンソン』であったという点について、さらに考察を深めることも可能であろう。その場合、身体論やセクシュアリティを巡る議論の観点から、周囲を取り囲んでいるのが、主人公を「喰おう」とする（あるいは噛みつき血を啜ろうとする）他者であるという点が重要なポイントとなる（この点については、武藤を参照）。このように、『レジェンド』を通じて「ゾンビ物」と『ロビンソン』を結び、文学批評のみならず、カルチュラル・スタディーズの対象として『ロビンソン』およびその変形譚について考える作業にも、さらなる可能性が認められる。

Works Cited

- Defoe, Daniel. *Robinson Crusoe*. Edited with an Introduction by Thomas Keymer and Notes by Thomas Keymer and James Kelly. (Oxford World's Classics), Oxford UP, 2007.
- Fallon, Ann Marie. "Anti-Crusoes, Alternative Crusoes: Revisions of the Island Story in the Twentieth Century." *The Cambridge Companion to "Robinson Crusoe,"* edited by John Richetti, Cambridge UP, 2018, pp. 207–20.
- Matheson, Richard. *I am Legend*. 1954. Gollancz, 2001.
- 水間千恵『女になった海賊と大人にならない子どもたち——ロビンソン変形譚のゆくえ』（玉川大学出版部、2009年）
- 武藤浩史『「ドラキュラ」からブンガク——血、のみならず、口のすべて』（慶應義塾大学出版会、2006年）
- O'Malley, Andrew. *Children's Literature, Popular Culture, and Robinson Crusoe*. Palgrave Macmillan, 2012.
- Patterson, James T. *Grand Expectations: The United States, 1945–1974*. The Oxford History of the United States. Oxford UP, 1996.
- Ransom, Amy J. *I Am Legend as American Myth*. McFarland, 2018.

若松孝司・高橋啓介「アメリカ外交政策とパナマ運河返還の意義——米・パ関係の歴史的考察を中心に——」『愛知淑徳短期大学研究紀要』第39号、2000年、pp. 41-59.

Waller, Gregory A. *The Living and the Undead: Slaying Vampires, Exterminating Zombies*. U. of Illinois P, 2010.

Weaver-Hightower, Rebecca. *Castaways, Cannibals, and Fantasies of Conquest*. U. of Minnesota P, 2007.